

- ・ 展示報告
- ・ イベント報告
- ・ 新収蔵品紹介
- ・ コラム
- ・ 学芸茶話

さかい
利晶の杜
だより
学芸
第3号

「利休の作意」

中村 利則



「国宝・妙喜庵待庵」の祖形を考察し復元した「さかい待庵」

武野紹鷗の時代まで、茶室は北向きに構えるのを原則としていた。その理由としては明る過ぎれば道具が「早々（鹿相）」、粗末に見えることをあげている。また東・西・南の向きでは陽の刻々の移ろいが室内に反映するために向きが吟味され、道具を真に見せるよう、明るすぎず、明かりの變化の少ない北向きに茶室を構えるのだという。

しかしそれら自体には蓋然性は薄く、むしろそうした理由にもまして考えられるのは、侘茶の原点とする書院での囲炉裏の茶が、主として会所の裏手にあたる北向きの、私的な生活領域に根付いたものであったことに起因するであろう。初期の茶室が北向きを原則としたのも、こうした成立事情を継承しただけのことであり、侘茶が本来は藝の性格を有し、当時の茶の湯がいまだ藝の領域性を脱皮するものではなかったことを示しているに他ならない。

茶室は北向きに構える原則があった時代に、孤高にも全く正反対の南向きに茶室を構えたのが千利休である。それは様態的には紹鷗の四畳半を写しながらも、茶室を南向きにするにより、侘茶を晴の領域に位置付けたことを意味する。そしてそのことがやがて、侘茶が茶の湯の本流となり、非日常の世界を造り上げていくための条件でもあったし、江戸期初頭の徳川秀忠・家光の式正御成に「数寄屋御成」が慣例化する前提でもあった。

そして天正十年（一五八二）から十一年春にかけて、それまでの唐物持ちがもつ四畳半に加えて、利休が豊臣秀吉の山城城内に営んだ茶室が、国宝妙喜庵待庵の前身である、極小で粗野な素材で造られた、二畳隅炉の極侘びの茶室であった。

企画展

〈近代の茶の湯—又妙斎と堺、そして女性—〉

平成29年9月15日(金)～10月15日(日)



この企画展では、主として明治期の茶の湯の姿を描いた錦絵と、同時代に活躍し、晩年堺に居を構えた裏千家12代家元又妙斎(1852～1917)の業績について

まずみなさまをお迎えしたのは又妙斎賛、圓能斎(裏千家13代家元、又妙斎の長男)画「利休居士画像」(今日庵蔵)です。利休と近代を結んでくれるこの作品は、さかい利晶の杜オーブンセラモニーの際に、南海庵(立礼席)の床に掛けられていたものです。堺にゆかりのある又妙斎と圓能斎の合作は、この展覧会のメインであり、オープニングを飾るのにふさわしい作品であったと思います。

茶の湯は、明治維新により大名家等の有力な後ろ盾を失うと共に、文明開化の時代を迎えて衰退していきます。そこで家元たちは、各地へ積極的に赴いて普及に努めました。そして江戸時代以前は男性が行うものであった茶の湯が女性にも広がっていきます。

第1章は「利休から近代の茶の湯へ」というテーマをプロローグとして設けました。利休の時代から「御茶湯御政道」の言葉がみられたように、茶の湯は政治的な意味合いを帯びていましたが、江戸時代になると幕府儀礼としても取り入れられました。また江戸城大奥でも茶の湯が行われていたことが知られています。

第2章は「描かれた女性の茶の湯」というテーマです。明治期に入ると、茶の湯は女性のあるべき姿として「女礼式」という礼儀作法の体系に取り入れられ、学校教育の場で普及していきました。表千家13代家元碌々斎、又妙斎やその妻の猶鹿、圓能斎らも女学校に赴いて茶の湯を教えていたことが知られています。

「女礼式」を描いたシリーズには、茶の湯単独で描かれたものと、同じく「女礼式」に取り入れられた囲碁、華道、音楽等と一緒に描かれたものがあり、今回は両方の意匠を展示しました。錦絵は3枚続のものも多く、近代に入ってからの鮮やかな彩色の影響もあって迫力があります。女性の着物の模様まで細かく描かれるなど見どころも多く、アンケートなどからみなさまに楽しんでいただけた様子が伝わってきました。

第3章は「裏千家12代又妙斎と堺」として、晩



年堺に住んでいた又妙斎について取り上げました。今まで、堺における又妙斎の事績はあまり知られていなかったのですが、今回は是非紹介したいと思っていました。当館から少し南西、現在の堺市堺区中之町西3丁あたりに居宅を構えていたと伝わり、本当にすぐ近くにお住まいでした。又妙斎はその居宅に「幽軒」という二畳中板の茶室を作り、しばしばお茶会を開いたそうです。

このコーナーでは、又妙斎筆の横物「教外別伝不立文字」(茶道資料館蔵)や自作の香合や茶約(共に茶道資料館蔵)などを展示しました。壁面には又妙斎の写真や年表等のパネルもご用意。また裏千家が戦前出版していた「今日庵月報」という冊子の中に、又妙斎関連の記事も多く掲載されていたため、今回は記事に出てきた堺近辺のゆかりの地を紹介するパネルを作製したところ、みなさまに親近感を持っていただけたようです。

又妙斎が亡くなってちょうど100年目の年に、終焉の地となったこの堺でご紹介できたことは、大変意義のあるものでした。この展覧会が、堺の近代や又妙斎についての研究が進む契機になればと思います。(小松原)



企画展

『新万葉集』刊行80年記念 『万葉集』の人間主義——不安な未来への希望を求めて——

平成29年10月27日(金)～12月10日(日)



平成29年は、『新万葉集』が刊行されてちょうど80年の年でした。『新万葉集』とは、明治・大正・昭和に詠まれた短歌を、著名な歌人たちが選歌・自選し2万6千首あまりを収録した近代の『万葉集』です。佐佐木信綱、北原白秋、斎藤茂吉など当時を代表する10名の歌人が審査員(選者)となり、そのうち女性はやと謝野晶子のみでした。

本展では、与謝野晶子をはじめ、『万葉集』に感銘と影響を受けた歌人たちが選歌した『新万葉集』の歌を通して、時代を超えても変わらないその思いを知っていただきました。

まず、最初のコーナーでは、晶子をはじめとする近代歌人たちが影響を受けた『万葉集』について明らかにしました。奈良県立万葉文化館より、江戸時代の版本や、ドイツ語訳の縮刷本、万葉かるたなど視覚的にも美しい貴重な資料をお借りすることができました。特にかるたは人気で、複製版を出してほしい、長い時間観ても飽きない、万葉集の歌がよくわかる、といった感想が多く寄せられました。親子で楽しみながら観ている方もおられました。

次のコーナーでは『新万葉集』が刊行された時代背景を年譜パネルととも

に紹介しました。当館では『新万葉集』を所蔵していないため、全11巻を市立中央図書館よりお借りしました。刊行時は、日中戦争が勃発するなど太平洋戦争に向かい始める時期であり、思想統制の強化から出版物への検閲も始まる頃でした。『万葉集』の「ますらおぶり」の歌が国家の政治的なプロパガンダとして利用される中、『新万葉集』の刊行もその一つの事業と位置付けられ、短歌史や晶子研究においてもほとんど顧みられることがありませんでした。そのため、本展で初めて『新万葉集』を知った方が多く「読んでみたい」や「書名は聞いたことがあるがこんな歌集とは思わなかった」と、『新万葉集』の存在を知っていただく機会にもなりました。

『新万葉集』の歌には、『万葉集』と同様に人間や自然への愛に溢れた歌が多く、現代、そして未来にも通じる人間本来の普遍的な思いが込められています。

本展のテーマであるその思いを紹介するため、

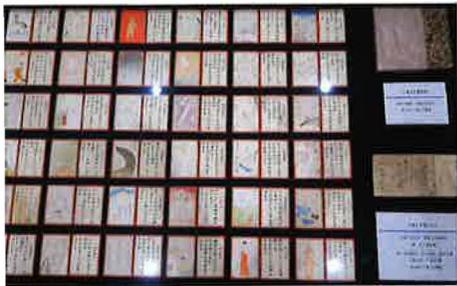
『万葉集』の歌と『新万葉集』の歌をテーマごとに分けてパネルで対比させました。また、来館者の方に短歌を作っていただくコーナーを設けて参加していただきました。

最後のコーナーでは、晶子を含む10人の選者一人一人を、パネルと著書などで紹介しました。中でも、与謝野夫妻と斎藤茂吉の連名の書簡は、初公開資料で、結社を超えた3人の交流と『万葉集』への思いを感じていただきました。また、選者たちの関係館にご協力いただき、肖像写真入りのパネルを製作し、各館のパフレットを配布して紹介しました。また、『新万葉集』の装幀を手掛けた横山大観画「不二霊峰」を小林美術館(高石市)より借用し展示いたしました。あらためて『新万葉集』が一流の芸術家たちによって手がけられたことを感じていただけたと思います。

無料配布の解説パンフレットは非常に好評で、会期の終盤には在庫切れとなりました。

本展では、『新万葉集』全巻と晶子の自筆原稿や歌幅・色紙をはじめ、斎藤茂吉の蔵書印が押された『万葉集』注釈書など約50点を展示しました。特に、改造社の社長山本實彦の出身地である「薩摩川内まごころ文学館」より晶子の『新万葉集』自筆原稿をお借りすることができたことは非常によかったです。晶子の自筆原稿には推敲の跡が見られ、削除された歌も書かれており、その選歌の過程をみるすることができます。晶子が心血を注ぎ、未来の人たちに遺したいという思いが伝わる貴重な資料の数々に足を止めてご覧になる方が多くいらっしゃいました。

(森下)



万葉集の人間主義





企画員 近代の茶の湯 ― 又妙斎と堺、そして女性 ― 関連講演会 & 茶会

9/30(土) 依田徹氏 講演会
「近代の茶の湯」

公益財団法人遠山記念館学芸課長の依田徹氏に「近代の茶の湯」というテーマでご講演いただきました。堺での講演会という事で、堺出身の正木直彦（まぎ なおひこ）のお話がメインとなりました。正木は東京美術学校（現在の東京藝術大学）の校長として、また茶人としても有名です。正木の年齢軸をベースに事績を追い、さらにその時期の茶の湯界の様相について詳しく解説していただきました。

10/7(土) 茶会
アフタヌーンCHA 特別編

又妙斎が晩年「幽軒」で催した観月茶会に思いを馳せ、「アフタヌーンCHA特別編」として茶会を開催しました。茶道裏千家淡交会堺支部のみならず全面的なご協



正木の茶会記に堺のお菓子、芥子餅の記録があることをご紹介され、みなさま正木に親近感を持たれたようでした。
(小松原)

力をいただきました。又妙斎とその妻猶鹿（ゆか）の還暦祝や住吉大社の献茶式に用いられた「保堂茶舗の「虎昔」の薄茶と、又妙斎が好み、観月茶会でも供された鶴屋八幡のお菓子「野辺の月」を利晶オリジナルで作っていただきました。また又妙斎ゆかりのお道具も展示させていただきました。ご参加いただいたみなさまに大変好評いただきました。
(小松原)

企画員 「新万葉集」刊行80年記念
万葉集の人間主義 ― 不安な未来への希望を求めて ― 記念講演会

11/7(火) 中西進氏 講演会
「万葉集」と「新万葉集」

堺市顧問で文化勲章受章者の中西進氏をお迎えし、ご自身の体験を踏まえながら、当時の不安な社会状況下における『新万葉集』の成立や選者としての晶子の思いなどについてご講演いただきました。75名もの方々が受講されました。



堺市顧問で文化勲章受章者の中西進氏をお迎えし、ご自身の体験を踏まえながら、当時の不安な社会状況下における『新万葉集』の成立や選者としての晶子の思いなどについてご講演いただきました。75名もの方々が受講されました。

れ、「先生の語り口がわかりやすかった」「また先生のお話を聴きたい」「時代背景がよくわかった」と中西氏のお話に大変満足されていました。また、企画展の解説パンフレットに沿ってお話下さったので、「新万葉集」はヒューマニズムですね」「今の時代に合致している話だった」といった企画展





＊与謝野晶子著『歌の作りやう』
(大正9年、東京堂書店刊)



＊雑誌『冬柏』(昭和5年～昭和21年、冬柏発行所刊)



★与謝野晶子著『新訳栄華物語』上巻
(大正3年、金尾文淵堂刊)



★駿河屋のラベル (右) 元祖練羊羹
(左 上から) 御菓子商標ラベル
屋号・住所・電話番号記載ラベル
取扱商品ラベル

●与謝野晶子倶楽部より＊
雑誌『冬柏』や書籍『歌の作りやう』
など250点。

与謝野晶子・寛が中心となって刊行
した雑誌『冬柏』が252冊。特に、
創刊年のものや、晶子没後の昭和17
年以降のものは希少価値が高いため、
貴重な資料です。また、書籍類では、
晶子の歌論書『歌の作りやう』が特
に装幀も美しいので、展示資料とし
ても活用いたします。

さかい利晶の杜(与謝野晶子記念館)
の開館を機に寄贈を申し出られまし
た。

●宮風武司氏より★

駿河屋商品ラベルや与謝野晶子・寛の
著書や雑誌、研究書など60点。

晶子の生家、駿河屋の商品ラベルは、
入手困難で希少価値が非常に高い資
料です。また、第二次『明星』や晶
子の著書は、美しい装幀で状態もよ
いため、展示資料としても活用いた
します。

ご寄贈いただいた宮風武司氏は堺生
まれの堺育ちで呉服商を営んでおら
れました。与謝野晶子を敬愛しその
資料を長年収集され、さかい利晶の
杜(与謝野晶子記念館)の開館を機
に寄贈を申し出られました。(森下)

利休の作意

中村 利則



国宝・妙喜庵待庵 撮影：田畑みなお

(表紙より引)

妙喜庵のある大山崎は、京都と大阪の府境、天王山麓にある。古くは嵯峨天皇の河陽離宮が営まれていて、その後には故地に山城国府が置かれたときもあり、平安京から、あるいは平安京へと出入りする要の地となっていた。かつては播磨大路、あるいは唐街道などとも呼ばれた西国街道が通り抜け、大山崎は水陸両路の交通の要衝として

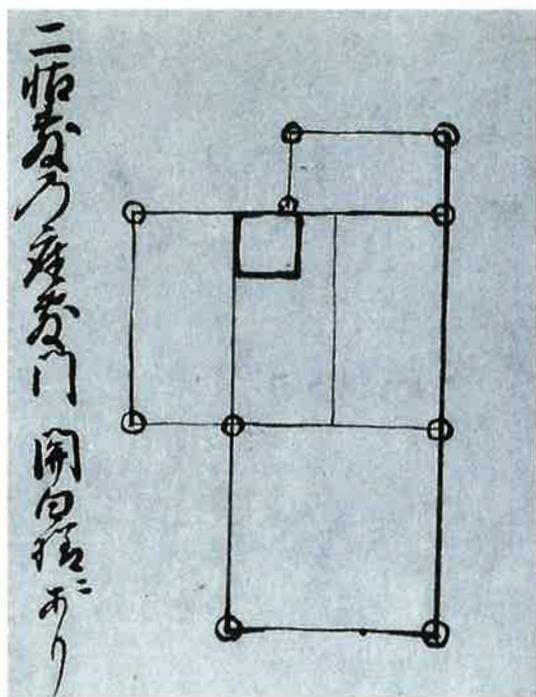
活況を呈した町であった。織田信長が本能寺に横死した天正十年、その後継を目指した秀吉は天王山中腹に山崎城を築き始め、この地を天下の都城とすべく計画もされた。しかし翌十一年夏、秀吉の大坂への転進によって、その計画も半ばで頓挫して、廃城とされてしまった。

ところで妙喜庵は、もと連歌師山崎宗鑑が大崎の竹林中に営んだ草庵(対月庵)を、明応(一四九二〜一五〇二)頃に春嶽土芳が譲り受け、創建された東福寺門末の禅刹である。南に高く石垣を築いた台地には、文明(一四六九〜八七)頃の造立と伝えられる方丈書院(重要文化財)を中核として、東に鞘の間を挟んで八畳座敷(旧明月堂写し)があり、北方背後に寛政三年(一七九二)に建てられた庫裏が接続している。そして茶室待庵は、もとは方丈書院の中門廊であったと考えられる鞘の間の南端に、南面して構えられている。

柿葺切妻造りの屋根を架け、妻入前面には庇を付け下ろして、南側に深い土庇を形成する。茶室内部は客畳一帖と手前畳一帖だけの、合わせて二畳という極小の空間である。そして手前座の左手に太鼓貼りの二枚襖を隔てて勝手(現在は「次の間」と称する)一帖、その北に取り合い(現在は「勝手」と称する)一帖が付随し、全体はほぼ一丈(十尺)四方の、すなわち方丈でもある。南向きに開く、幅、高さとも、のちの定めからは二回りほど大きい躰口を入った正面に床を構えるのも、器物賞翫を第一義とした利休の茶の湯を物語っている。間口幅四・〇六尺の床は、入隅の柱を隠して土壁を塗り廻し、天井も高さ五・三二尺と、異常に低

く抑えて土壁を塗り上げた、いわゆる室床である。そして粗野な丸太材や面皮材、床框の三つの切節や長坊の乱れ飛ぶ荒壁の表情とともに、その力強く緊張した空間は極侘びに徹しており、そこには草庵茶室の姿が大成されていて、待庵はその原点とも論じられてきた。

この待庵には、天正十年から十一年という時代の特性と、草庵小座敷の先駆としての古態が、確かに多く遺されている。たとえばあの大きな躡口、また左右の床柱とともに打たれた花掛釘や、下端にわずかながら面皮を残した床の落掛、そして障子に使われた竹骨の組子、あるいは壁の下地として木舞竹ではなく葎が使われ、えつり竹を買状に用いている仕様など。その壁に穿ち明けられた窓は、それこそ下地窓という字義通りのもので、他に類例をみず、手法と技術的な古態が認められる



関白様御座敷 二帖敷図
『山上宗二記』所載 齋田記念館蔵

のである。左勝手にして、上座床の構えは武野紹鷗時代からの常道に倣いながらも、炬を手前畳の左隅、向炉隅切(隅炬)に切るといふ斬新な構成である。それはそれまでが手前畳の横手に炬を出して切る、出炬の四畳半切や平三畳敷での上切しか例がなく、入炬の隅炬はどこか台子の風炉・釜をユカ下に埋め込んだようで、厳格さを秘めながらも、亭主の身体はやや外向きになり、客に対して密やかに手前する、茶立所の雰囲気さえ漂わせている。

ところでこの待庵の建立については、不明な点が多い。ただ江戸時代の地誌や茶書の多くは、利休が秀吉の命により妙喜庵に創建したと記していた。そうしたなかで堀口捨己は、待庵と方丈書院間の接合の不具合などから、利休が妙喜庵に創建したとする伝承はそのままだと信ぜられず、

利休作は揺るがないものと考えながらも、元から妙喜庵に建てられたものではない、と論じられた。そして待庵が創建された時期と場所については、利休と秀吉との関わりを認め、秀吉が山崎城を営んだ時、秀吉に随伴して大山崎に屋敷を構えた利休が、その屋敷内に好んだ茶室が待庵であるとする。ただ翌十一年の大坂転進に伴う山崎城廃城後は、「宝積寺絵図」に描かれた利休屋敷も撤収され、茶室待庵は

その近所の、利休とも親交のあった功叔和尚の妙喜庵に再興されたのであろう、とする仮説を立てられ、それが伝承以上に説得力を持って学説的に踏襲されてきた。

しかしながら江戸期以来の諸書における待庵の、秀吉との伝承に加え、その創建に関わる利休書状を読み解いていくと、その仮説にも疑問が生じ、待庵は秀吉の要請により、折から築造が進められていた山崎城において、利休が造立したと考えられるほうが蓋然性をもってきた。『山上宗二記』に掲出された「関白様御座敷」二畳も、それまでは大坂城山里の二畳に比定されてきたが、その内容から、これこそ山崎城での創建待庵を記すものであると想定されるに至った。そしてそれは天正十一年三月には竣工していたものの、秀吉の大坂転進にともない、創建待庵は席披きもされることなく取り壊されてしまったのだろう。それを惜しんだ秀吉は改めて大坂城で利休に命じて造ったのが、山里の二畳であったと考えられる。

取り壊された創建待庵は、天正末年頃、おそらくは利休も秀吉も亡くなった慶長三年(一五九八)過ぎに、利休とも、秀吉とも親交のあった妙喜庵の功叔和尚がその遺材を譲り請け、自坊に再興したのが現在遺る国宝待庵なのだろう。そして待庵に見られる間口四尺の床や、前面の土庇など、時代が下ると考えられる要素は、時代風への変容でもあった。

(なかむらとしのり/京都造形芸術大学 歴史遺産学科教授)

も「と楽しんでむと謝野晶子記念館の展覧

「ほうじょう」さんと聞いて何人の方が、わかるでしょうか。鳳しようつまり、与謝野晶子さんの結婚前の名前です（晶子はペンネームで、本名は結婚後もしようでした）。この記念館では、偉大な歌人・評論家・教育者であった与謝野晶子の業績だけではなく、商家の娘で「しよう」とは「いとほん・上方での女の子への愛称」と呼ばれていた時代の晶子のごとも紹介しています。

記念館に入り詩歌の森を抜けて、鏡台を探してください。晶子が使っていた実物資料です。鏡にあなたのお顔を映して、そのまま、足の向きを九〇度左へ回してください。そこに見えるのが、現在の宿院の大阪信用金庫の北あたりから、大道筋をはさんで向かい側にあった晶子の生家である駿河屋の姿です。路上のガス灯も二階の時計も店先もきちんとみえていることでしょうか。そのまま、駿河屋に向かいます。夏ならば、涼しげな白のれんが、それ以外の季節ならば、落ち着いた色ののれんが店先に飾ってあります。堺の町で生まれ育ったお年寄りに聞いたところ、駿河屋というところ、羊羹等を使う小豆を蒸す湯気が、外まで絶えず吹き出してきたのが、とても印象的であったとのこと。記念館ではさすがに湯気はありませんが、そのままみてみましょう。

駿河屋の帳場には結果が設けられ、帳場机があります。その上には、算盤と一冊の本が置かれています。本は晶子が生涯にわたって取り組んだ源氏物語です。読書家のお父さんの本棚から持ち出しました。現代ならば、菓子店のレジの横で、接客の合間に、学んでいる店員さんのようなイメージでしょうか。ご進講を受ける華族の娘でもなく、家庭教師が付いた富豪の娘でもない彼女は、自分の家の帳場机で商いの仕事をやる合間に、千年前の女性作家の古典を読んで、その感性を育んだのです。晶子を生んだ商いのまち・堺。展覧場を出たあとは、晶子の歌碑を探しながら町を歩いてみてはどうでしょうか。堺で生まれ育った晶子の娘時代、そして当時の堺の町についても想いを馳せてみませんか。（矢内）

ご利用案内

- 休館日** ●千利休茶の湯館、与謝野晶子記念館、茶の湯体験施設 第3火曜日（祝日の場合は翌日）及び年末年始
●観光案内展示室 年末年始
●駐車場 年中無休
- 開館時間** ●千利休茶の湯館、与謝野晶子記念館、観光案内展示室 午前9時～午後6時（最終入館 午後5時30分）
●茶の湯体験施設 午前10時～午後5時（最終入席 午後4時45分）
●駐車場 24時間
- 駐車場** ●普通車 1時間200円（1日最大1400円）※さかい利晶の杜施設利用者に割引があります。
●バス 1回1,000円【予約制】



交通アクセス

- 阪線 宿院駅より徒歩で1分
- 南海高野線 堺東駅よりバスで約6分（宿院バス停下車）
- 南海本線 堺駅より徒歩で約10分 バスで約3～5分（宿院バス停下車）
- JR阪和線/南海高野線 三国ヶ丘駅よりバスで約10分（宿院バス停下車）
- 阪神高速15号堺線 堺ICより車で約3分
- 阪神高速4号湾岸線 大浜ICより車で約3分

利用料金

区分	大人(大学生含む)	高校生	中学生以下
観光案内展示室	無料	無料	無料
千利休茶の湯館・与謝野晶子記念館※1 (2館ともご覧いただけます)	300円	200円	100円
立礼呈茶(抹茶と和菓子)	500円	400円	300円
茶室お点前体験【予約制】	500円	400円	300円
さかい待庵特別観覧セット【申込制】 (展示観覧・立礼呈茶含む)	1,000円	800円	500円

※1 常設展観覧料は障がいのある方と介護者、堺市内在学の小中学生と引率教職員、未就学児は無料

編集後記

利晶の杜の茶室建築監修者である中村利則氏による「国宝・妙喜庵待庵」のコラムは大変読みごたえのある内容でしたが、いかがでしたか。茶室における利休の作意を少しでも感じ取っていただければ幸いです。利晶の杜の「さかい待庵」にもぜひお越しください！
(餅原)